

## 駆け出し普及員と江戸川の西洋蔬菜

大城 芳彦

葛西囃子の音が遠く近く小耳に伝わってくる夏空の下、緑の自転車を止めて野菜畑に降り立つと、むせ返るような下肥(人糞尿)の臭いがグツと胸に迫ってきたアノ頃が、今でも懐かしく思い出されます。

総勢 15 人の同期生とともに入都した私が、江戸川地区(江戸川区・江東区) 担当普及員として都農試江戸川分場内に配属されたのは昭和 25 年ですから、もう半世紀も昔の話になります。当時の直接の上司は田中実さん、地方主任が松本壺さんで、何も分からない私にてこずりながらも普及活動の手ほどきをして下さった大先輩です。

半年後に田中さんが転任され、新規に高鳥四郎さんと今井龍介さんが来られて苦楽を共にしましたが、数年後今井さんが巡回中の交通事故で殉職されたことは痛ましい限りでした。

この頃は敗戦後の混乱がまだ尾を引いていた時代で、農業界全体が食糧増産に打ち込んでいたわけですが、そんな世相の中で、江戸川区の一部野菜農家の間では、すでに西洋蔬菜(カリフラワー、サラダナ、パセリー、ラディッシュ等)が専門に作られていたのには驚きました。

### カリフラワー

恥ずかしながら、立毛のカリフラワーを見たのはこの時が初めてで、外葉をかき分けると、茎の頂点に白い雪の固まりのような花蕾が見えてくるのが何とも不思議でした。

当時、カリフラワー作りの第一人者といわれた一之江の岩楯重錘(シゲカネ)さんの家へ時々寄って栽培法を教わろうとしたのですが、話の合間に「先生！先生！」と持ち上げられて、あまり愚問を發するわけにもいかず、アレには大変弱りました。

当時の品種としてはアーリー・スノーボールが主体で、自家採種をしていたのでいろいろな系統があったようです。なかでも岩楯系は、早穫りができて純白度が高く貴重な存在となっていました。野崎早生もありましたが、作りやすい半面品質的にはやや劣る存在でした。

### 江戸川のセルリー

江戸川のセルリーについては、戦前から作られていたのですが大戦で中断し、私が赴任した時はまだ見ることはできませんでした。

昭和 26、7 年頃江戸川分場でセルリーの品種及びは種期試験を行うようになり、管内農家にも栽培の気運が芽生えてきました。その頃、私の下宿が近かったこともあって、当時農協青年部員だった真利子参治さんの兄さんとアメリカの種苗カタログを片手に、セルリー導入を夜遅くまで検討したこともありました。

間もなく江戸川のセルリー栽培は、若い人達を中心に盛んとなり、東京市場でも貴重な産地となっていくわけですが、私がタッチしたのはごく初期だけで転任となりました。

一般にセルリーは難しい作物とされており、その原因として抽苔しやすいことと、アブラムシによるバイラス対策をどうするかが問題で、このため江戸川では秋作が敬遠され春作主体の作型になっていきました。

アブラムシという思い出す話がありますが、その頃分場では、終業後エチルアルコールを薄めた飲み物で一杯やって帰るのがお決まりでした。ある日、アヒル肉とセルリーで高級すき焼きをやるとうことで、ネギやハクサイの代わりにセルリーをどっさり入れて作ったまではよかったのですが、鍋を覗いたところ、葉に付いていた小さなアブラムシが一面に浮いているではありませんか。一瞬たじろぎましたが、これも動物性蛋白と気をとりなおして食したところ、肉とセルリーはまことによくマッチした組み合わせであることがわかり、ムシのことなど気にならないほど結構な味でした。

このころの品種としては、緑色の濃いユタ系統と中間色のコーネル系統、黄色がかったゴールデン系統などありましたが、葉柄が厚く軟白して色上りのよいコーネル系がよく使われていました。（当時のセルリーは軟白しないと売れませんでした）

## レタス

次にレタスのことですが、江戸川方面ではすでに大正時代には栽培されていたようですが、私が赴任した頃はバターヘッド型のいわゆるサラダナ栽培がほとんどでした。一方分場ではクリスプヘッド型結球レタスの将来性を見込んで、全国でも逸早くその適品種とは種期試験に取り組んでいました。

私も学生時代に結球レタスの水耕栽培を手伝っていたこともあって、この野菜は将来江戸川の基幹的作物になるとの思い入れがありましたので、極力普及をはかってみました。ところが流通、消費段階でまだ認知されていなかったため、市場へ出しても二束三文にしか売れず、全く普及されませんでした。

これに対しサラダナは業務用に欠かせない洋菜で、品薄時には価格が暴騰することもあるって、有利性の高い野菜として長く産地が維持されてきました。そうした実態を経験するにつけ、産地ができるには、それなりの合理性が必要なことを勉強させてもらいました。要するに、産地づくりの基本であるマーケティングリサーチが全然できていなかったということです。

当時のレタスの品種としては、玉レタスではグレートレイク系、インペリアル系、ニューヨーク系などがあり、結球性と作りやすさから前二者が主要品種となっていました。サラダナはワイヤヘッド主体ですが、これもカリフラワー同様専門農家は自家採種していたのでいろいろな系統があり、葉が厚くて緑色の濃いものへと選抜されていった結果、各地で独自の江戸川サラダナを輩出しました。後にそれらの代表種ともいべき北篠崎町の伊藤仁太郎さん育成した黒種サラダナが有名となり各地の生産者にとって垂涎の的となった

種子でした。

## 戦前の江戸川農業

ここで戦前のことに少し触れておきますと、もともと江戸川方面では、すでに大正時代初期には漢字表現で花椰菜、子持甘藍、萵苣(チシャ)、塘萵(セルリ)、二十日大根の洋菜類が栽培されていましたが、昭和 10 年前後の頃が戦前としては最も盛んだったようです。

それは、東京万国博覧会と初めて東京オリンピックが昭和 15 年に開催される予定になっていたことから、農家の栽培意欲が高まったためといわれています。来日外国人用の野菜として特需が見込まれたわけですが、内外情勢の悪化により両者とも途中で中止になりました。しかし、栽培の方はその後も続けられ、自家採種のせいもあって大戦中のきびしい統制経済をくぐり抜け、貴重な種子を大切に保管していたために、終戦後いち早く産地として復活した経緯があります。

また、冒頭で下把のことを書きましたが、主に生食する洋菜をそのような下肥畑で栽培すること自体矛盾していたことは、当時からすでに問題視されていたこともあって、東京市産業局では昭和 11 年度からの奨励事業として、蔬菜清浄栽培事業を 20 戸の篤農家で実施していたことが記録に残っています。その担当農家の中には、模範農業青年を自認されていた宇田川嘉一郎元都経済連会長や前記した岩楯さんのお名前も載っており、さすがという感じです。

以上、洋菜についてだけ述べましたが、いうまでもなく江戸川方面は一般野菜についても先進産地であったことから、数々の種類や栽培法と、それを駆使する生産農家に若くして接することができたことは、まことに幸運であったと、今なお感謝している次第です。

なお、私は最後の 4 年間で JA 小平市で営農指導の仕事をさせていただきました。このとき普及の原点はやはり巡回によるフィールド活動にある事を思い出し、道を覚えるためもあって自転車で組合員宅を回ってみました。指導機関に寄せる農家の心情は 50 年たっても変わっていないことを実感いたしました。

72 歳 2000 年記

## 大城芳彦氏のプロフィール

昭和 3 年 8 月 20 日生まれ、東京農業大学専門部農学科卒

昭和 25 年東京都農業改良普及所江戸川地区駐在、八丈島駐在

北多摩農業改良普及所所長

東京都農林水産業後継者育成財団事務局次長

JA こだいら市営農指導相談室長

「江戸東京ゆかりの野菜と花」執筆メンバー